

萬 鐵 五 郎 (一) — 生涯と芸術 —

陰 里 鐵 郎

序

万鉄五郎の制作活動は、明治四五年（一九一二）から昭和二年（一九二七）の期間であった。即ち、それは大正期と全き重なりをなしている。その発端は、日本近代洋画史に画期をもたらしたヒュウザン会であり、終焉は日本的フォーヴィスムの集団となった独立美術協会の前身、一九三〇年協会の時期であった。万は、そのいづれにも深い関係をもっている。万自身の芸術的出発がヒュウザン会であったし、一九三〇年協会、独立美術協会の構成会員には大正末期に万を中心として設立された円鳥会のメンバーが多数含まれていた。この間、僅か一五年、或は前後二年を加えた一七七年間における万の芸術の展開は大正期洋画の一つの側面を明示している。尤も、大正期洋画、と元号を冠して時代区分することにたいして意味があるわけではない。ただ、大正期美術、大正期洋画といった言葉が歴史的用語として慣用され、定着しようとしているのが現状であろう。重要なことは、近代日本洋画が西欧絵画移植で歴史を織りな

万 鉄 五 郎 (一)

してきたなかで、黒田清輝に始った外光派的折衷主義が明治後期に日本洋画のアカデミズムを形成した一般的な状況に対して、これに鋭く対置する近代的造型を創造したことである。その意味で日本洋画が近代性を獲得したのは大正期にいたってからといわねばならないであろう。近代性獲得のためには幾多の困難と闘わねばならなかった。宿命的な日本洋画の移植的性格と土着化即ち西欧近代絵画との対決、また日本の長くすぐれた美術伝統との対決、これらの命題を回避することは許されなかった。万の芸術が、これらの命題のすべてに成功した解決を得たわけではないが、万の生涯はそのための闘いで総てであった。更に付け加えるならば、近代的芸術を許容する社会もまた未だ出現していなかった。近代洋画における秀れた才能をもった画家達が早々に死地に追いやられた原因の大半はここにあったといわねばならない。

万鉄五郎（一八八五—一九二七）の芸術的展開はほぼ三つの時期に分けられる。

第一期は、美術学校後半期からヒュウザン会参加の時期（一九〇八—一

九一四）、フォーヴィスム時代。第二期は、郷里に沈潜した時から再度上京して湘南茅ヶ崎へ移るまでの時期（一九一四～一九一九）、キュービスム時代。第三期は、茅ヶ崎居住から死まで（一九二〇～一九二七）、東洋回帰、円熟の時代である。本稿では生い立ちから美術学校入学までの道程をも加えて、万鉄五郎の全生涯に照射を試みたい。

なお、筆者は先に万鉄五郎文集である「鉄人独語」（土方定一編・中央公論美術出版社刊）において万鉄五郎年譜と作品目録を作成したが、年譜と制作年代について幾つか誤りをおかしているので、本稿の論述のなかでそれを訂正したい。

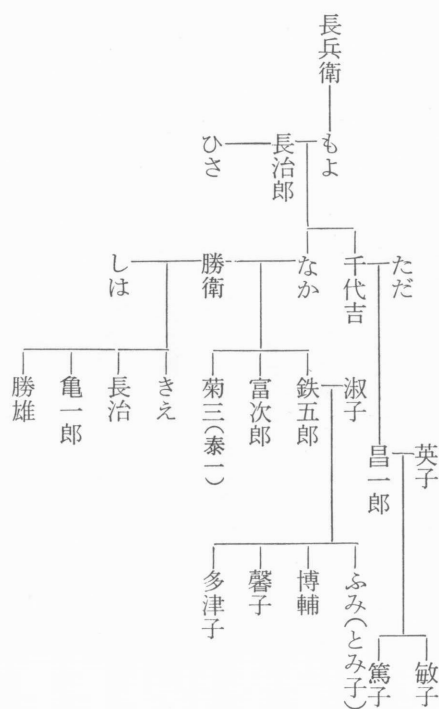
生い立ち

万鉄五郎は明治一八年一月一八日^{註1}に生まれた。生地は、岩手県和賀郡十二箇村、現在の和賀郡東和町土沢である。土沢は花巻から遠野・釜石を結ぶ街道筋にあり、花巻から約一三キロ、遠野とのほぼ中間に位置した小盆地のなかに、南側に猿ヶ石川が流れ、北側に小高く連なった丘に沿って東西に長い伸びた家並をもつ小村であった。

万家は、この地より西よりの小山田部落にあった菊池家の分れと伝えられ、土沢部落の八幡沢という処に最初に家をもち、代々長兵衛を名のったところから屋号を「八丁」といい、家業は花巻地方から農産物を、釜石方面から海産物をそれぞれ中継する物産問屋を営み、鉄五郎の幼年時代には多大の田畑をも有した村随一の資産家であった。

鉄五郎の母なかは、万家五代に当る長治郎の長女で、八重樫八十治郎（後に通称を勝衛と改名）を婿養子に迎え、三子をもうけたが明治二六年六

月三〇日、鉄五郎八才の時に死去している。鉄五郎は異母弟妹四人を含めた七人兄弟の長男であった。母の死後、彼は祖父長治郎、伯母ただに二才歳下の従弟昌一郎と共に養育されることになった。ただの夫千代吉も明治二一年に既に他界していた。



東和町教育委員会の記録によると万は、明治二九年四月一日、土沢尋常高等小学校一年に入学している。従って尋常科入学は明治二五年四月であった。参考までに高等科時代の成績をあげておくと、一年次——能、三。二年次——能、三。三年次——善、三。四年次——善、三となっており、明治三三年三月二九日同校を卒業した。この時から上京するまで、一五歳から一八歳までの三年間を万は土沢の地にそのまま過ごすことになった。鉄五郎自身は上級学校に進むことを望んでいたが、祖父長治郎は嫡孫昌一郎と共に兩名を身辺から手離すことを嫌い、その当時最も新奇だった自転車やカメラ、ヴァイオリンなどを買い与えて兩名の歓心をかき、進学を許さなかったと伝えられている。

このように鉄五郎は、幼年時代を物質的には恵まれた環境のなかで幸福に過したと想像される。同郷の洋画家清水七太郎はこの頃の方について幾つかの挿話^{註2}を伝えている。鉄五郎少年は、戦さ草紙にばかり見とれて家内にこもり、余り戸外へ出ない内気でおとなしい子供で、六歳の頃、盛んに画をかいては近所の子供に分け与えたり、天旗（紙鳶）を自作しては軍人などの絵を描きこみ、街の子供等はそれを欲しがって集り本職の紙鳶屋を困らせたことや、動物を好んで描き、殊に猫を得意とし、多少長ずるに及んでは山・川・田圃を写生し、成沢寺の庭にある萱を独り熱心に写生していた。高等科一年の時に郡内の小学校連合学芸展覧会に全唐紙に山水画を描いて出品し、秀れたものとして郡役所の買上げとなったことなどである。

右のような挿話は幾分かの誇張を含むとしても、万が少年時代から絵画を好み、通常より秀いでた才能の持主であったことを物語るには充分である。万自身が自己の最も早い時期にふれた文章である「水彩画と自分」（「みづゑ」大正十二年十月号）の中で次のように回想を記している。

僕が水絵を習い始めたのは随分昔の事です。初めは日本画を習って居た。山水などもかなり模写したように覚えて居る。はっきり覚えなないが十七位の時と思ふ。或る日新聞に「水彩画の榮」という本の広告があったので早速買って読んでみた。何んだかその時非常に清新とでもいう様なそそられる様な感じを受けた。そして自分にも直ぐ水彩画が描ける様な気持ちになってその時までやって居った日本画が急につまらなく思はれる様になったと思う。指定された道具を買って幾枚かの静物を作った。風景も一二枚かいた筈だ。自分では非常によく出来た様な感じがした。その本のおしまいの方に著者に作品を送れば批評してやってもよい意味がかいてあった

万 鉄五郎（一）

ので早速送ってみる事にした。著者は即ち大下藤次郎というかなり長い名前の人である事を知ったのである。

この記述に明らかなように、万は日本画を習っていた。「習ふ」といっても、東北地方の草深い農村において正則の日本画習学の方法がある筈はなく、全くの独習であつたらうと考えられる。現在、東和町土沢の万家に残されている「応翠筆^{註3} 山水画譜」粉本模写一冊（挿図1）は、この頃の万の勉強ぶりを物語っているが、その末尾に

明治三十二年の夏蟬なく木の下にて写す

よろず 萬鐵五郎寫

の記入があり、鉄五郎が高等科四年生、十四歳の時であることがわかる。また日本画独習の一方に、「高等科第四学年 万鉄五郎画」の記入

万 敏子氏藏

挿図1 応翠筆 山水画譜粉本模写

のある「老婆像」「家」「橋」（万博輔氏所蔵）などの鉛筆スケッチの数葉が遺存している。これらの小品が示しているものは、辺鄙な農村環境と年令を思い合すれば、決して凡庸ではない、といわねばならないであろう。

このような時に万は大下藤次郎著「水彩画の榮^{註4}」を手にし、水彩画を描き始めることになったのである。文庫本大

この小書の初版は明治三四年六月であるから、万が入手したのはおそらくその直ぐ後の頃であつたろうと思われる。この小書は水彩画を描くための極めて初歩的な入門書で、水彩画の方法を著者の知識と経験から懇切丁寧に叙述し、その末尾に「此の契によりて画きしもの御批評を願はるべきか。答、取まとめて御郵送になれば拝見の上著者の経験など申上べく猶不明の廉は遠慮なく質問あるべし著者は喜んで御答へ申上べく候」と書かれてあつたのである。上級学校への進学、狭隘な郷里からの脱出の欲求を、祖父の過多な愛情によって抑圧され、閉塞した環境のなかで僅かに日本画粉本模写や写生に喜びを見出して多感な少年時代を送ることを余儀なくされていた万にとって、この小書は新しい世界を啓示されたように「清新な」感情をもって受入れられた。かくして彼は、静物・風景を水彩絵具で描き、大下藤次郎のもとに送り批評を受けたが、明治三五年一〇月、大下の欧米旅行出発のために中断した。

明治三五年四月一日、祖父長治郎は六三歳をもって死去した。強力であつた祖父の支配から解かれた方は、従弟昌一郎と共に、翌三六年の春、博覧会見学を口実に上京した。親近者の伝えるところによると昌一郎の母ただは、両名の密かなる進学希望を承知の上で上京を黙認していたという。

同年一〇月六日、鉄五郎と昌一郎は私立早稲田中学校の第三年級と二年級にそれぞれ編入学した。上京から早稲田中学編入学までの間のことは、同校の学籍簿の記録に見られるが、それによると「三六年四月神田中学に入り第三年級在学中、中学郁文館に転じ同く在学中転学」となつ

ている。また、この時の保証人万タダの住所は、東京市下谷区上根岸町百十七番と記載されているが、万と昌一郎はこの住所に居住して早稲田へ徒歩通学していたと思われる。^{註5}住所については、其の後明治三九年五月の渡米までの間に、三八年四月には牛込区矢来町三番地山里甲三十六号、三九年五月には小石川区白山御殿町百二十七番地に居住していたものと思われ。^{註6}

明治三九年三月までの万の中学時代について特記しておかれるべき三つのことがある。その一つは、在郷時代に始つた水彩画を続け、相当の自信を得るに至つたことである。この間に大下藤次郎と直接接触をもつた。一つは菊坂洋画研究所に通い、長原孝太郎についてデッサンを勉強したこと、いま一つは禅堂に通つて参禅していたことである。

万はこの時期を回想して次のように書いている。

其の後大下氏は洋行したので批評して貰う事は出来なかつたが、洋行から帰られて暫く青梅に落着かれた時に絵を持つてお訪ねした事がある、大下氏は青梅で随分勉強して居られる様であつた。その時は如何に天分が豊富でも洋画家は絶えず窮乏と戦う覚悟が必要である事を操返し注意されたと覚えて居る。これは僕が当時中学生だったので、若し専門の画家を志すならば、そんな事を予じめ知つて置く方が便利だと考へられたのであつたろうと思はれる。その後中学を終る迄ずっと水彩画をかきつづけた。そしてかなりな自信を持てる様になった。当時絵をかく友人も学校の中できなり見出された。友人の仲間でも僕の水彩画は評判がよかった。自分でも既に素人ばなれがした様な氣持で居た。友人の須藤、増田、桜井などという人達が奔走して学校に美育部というものを起して度々水彩画の展覧会をした。(前掲・「水彩画と自分」)

『追想大下正男』所載の年譜によれば、大下藤次郎が欧米諸国を巡遊して帰国したのは明治三十六年六月のことであり、青梅仲町の借家へ移ったのは同年八月十五日のことであったから、万が自作を携えて青梅の大下家を訪問したのはこの年の秋の頃でもあったろうか、と想像される。しかし万はその後、大下と深い交渉を持つには至らなかった。前掲の一文の続きの個所で、友人達が大下の指導を受けて研究会をつくるようになった頃、万は美術学校へ進み油絵を描くことになったことを書き記し、「がしかし水彩画で勉強した色彩の見方は充分役に立つ様に思っ

て居た」と書いている。こ

の頃の万の水彩画は数葉遺存しているが、大下調の丹念な描写、明るい色調をもっており、なかには強い筆触をもち後年の万の片鱗をうかがわせるものが認められる。(挿図2)

このように万が水彩画に熱中していた明治三〇年後半は、わが国の水彩画隆盛の時代として特筆されている時期であった。黒田清輝帰朝後の外光派的な明るい色彩をもった洋画作品が、

挿図2 早稲田風景絵葉書

万 泰一氏蔵

抬頭期にあった明治市民の感情に受け入れられ、ようやく洋画に対する趣味が一般に普及してきたことを背景にして、手軽な材料の水彩画が当時の青年子女の趣味生活にとり入れられ、作画を試みるようになったのであった。それにはまた、大下・三宅克己・丸山晚霞などの水彩画家たちによる精力的な啓蒙活動の展開も力があつた。有識層の青年達、例えば学習院中学部の児島喜久雄、高等学校生木下奎太郎らが水彩画を学び、画論を聴取に水彩画家を訪問したのであつた。^{註7}万もまたこの時代の趣味と思潮を共有するものであつた。このような水彩画流行のなかで、万は自らを素人離れた域に達した、と感じる程の自信を持つまでに成長していった。

明治三八年、中学校五年二〇歳の時、通学の旁ら本郷区菊坂にあつた白馬会第二洋画研究所(菊坂研究所)に通い、長原孝太郎、小林鐘吉らの指導を受けてデッサンの勉強を始めた。この研究所は明治三七年に設立され、翌三八年九月には藤島武二留学のため藤島が指導を担当していた白馬会駒込研究所と合併した。万はここで石膏デッサンに始まる洋画の基礎的な勉強を正式に受けることになったが、中途に約半年間の渡米期間をはさんでこの研究所で修業し、美術学校に入学することになったのである。穏和な性格の万は長原の熱心な指導のもとで地道に研鑽したと思われるが、後年「菊坂研究所の思い出」(「みづゑ」大正十四年九月号)のなかで長原孝太郎について

僕は特に長原さんのデッサンが好きで其の頃から好意を持つ様になった。長原さんはあの頃から驚くべき科学的な頭と脱俗感を持っていたと思います。

と書いている。当時、長原は黒田清輝の下で東京美術学校助教教授を勤め、白馬会展に作品を発表していたが、それ以前の諷刺画や挿絵で広く知られ、華々しい活躍はなかったが誠実な指導、俗に殖しない諷刺と諧謔を備え、知的で東洋的な「脱俗感」をもつ作家として生徒の敬愛をうけていた。長原に対する万のこの好意と評価には、後年に整理されて書かれたものとは云え、長原への強い親和の感情が読みとれ、其の人間的な性格と後の彼の造型がもった性格の一面をうかがわせるものがある。すなわち、万の作品にみられるようになった諷刺と諧謔、科学的な造型思考と共通する側面を万は長原のなかに見出していた。がしかし長原の影響下にあったということは認められない。

このような通学、研究所通いの一方、万は円覚寺派の僧輟翁宗活が谷中に営んでいた禅堂両忘庵に通い参禅していた。参禅するに至った経緯について、諸氏の語るところを総合すると次のようである。

伯母ただは、舅長治郎の死後、家業と資産を継承維持しなければならなかったが、長治郎の死の翌年には東北地方に大飢饉が起り、小作人との取引、分家筋による財産分与の紛争などの困難事に遭遇し、そのために歩行困難に至る程の神経衰弱症となったが、この時に花巻市出身の松岡忠一氏の薦めで宗活禅師に帰依して修業、精神的安定を得て快癒した。ただし息昌一郎、甥鉄五郎をも参禅せしめるにいたった、ということである。

この草庵において万は、後藤瑞巖、田子一民、松岡忠一、後に万のパトロン的な存在となった大沢久蔵の諸氏^{註8}を知り共に修業することになった。田子一民は禅堂における万について「風格はあかぬけがし、俗気の

ない、御世辞のない、そして親しみのある」「超脱した青年」であったと回想し、釈尊降誕会の余興戯劇で万が自殺した一高生藤村操に扮した挿話などを伝えている。^{註9}

右の経緯に明らかなように、参禅の動機は万の自発的な意志によるものではなかった。比較的多くの文章を書き残している万であるが、禅堂内のことを口外することを禁じた宗教的規律に従ってか、彼自身は参禅の体験とこれに続く渡米に関しては何一つ書き残していない。そのため、この参禅体験が万の人間形成、思想形成の上にどのような影を投げかけているかを推量することは極めて困難なこととなった。この問題に関しては、土方定一氏は万の絵画に対する根本的な精神的態度に大きな宗教的影響のあったことを彼の画論から推し測っており、宮川寅雄氏は「参禅伝説」の思想的形成に果たした役割に否定的で、むしろ東洋的なものとの対決があったとしている。^{註10}筆者のこの問題に対する検討は後の章で述べることにしたいが、自己形成期におけるかかる体験が後年の絵画思想や芸術的な態度に何らかの投影をもったであろうことは否定できないと考えている。

なお、この両忘庵において万は、雲樵居士と称したが、これは中国の画家倪雲林と日本の文人画家池大雅の別号九霞山樵より一字ずつとったものであり、これらについても後の章における日本画考察の時に言及したい。

こうしている間に万は、明治三十九年三月三十一日、早稲田中学校を卒業し、同年四月早稲田高等予科に進んだ。参考までに中学時代の学業成績を略記すると、高学年に進むにつれて成績は下降し、三年級において席

次は四人中二一番、四年級四人中二六番、卒業の時には一四二人中一二番となつてゐる。比較的好成績を修めてゐるのは国語漢文、図工で、素行は秀れた点数を与えられている。おそらく絵画への情熱が昂じてつれて成績は下降線をたどつたものと推察される。

早稲田高等予科に進学した明治三十九年四月から一月後の五月一〇日、万は両忘庵一行と共に宗活禪師に随行して神奈川丸でアメリカに向つて出発した。一行は宗活・後藤瑞巖・大沢久蔵・佐々木指月・万昌一郎ら十数名で、宗活禪師の目的とするところは、その前年宗活の師、釈宗演が渡米して鈴木大拙を随えて臨濟禪の布教にあたつてゐたその志を継がんとするにあり、土地を求めて入殖し、開拓農業に従事して新天地に禪を伝道しようと試みたものであつた。^{註12}一行はバークリーの近郊ヘイワードというタウンに一〇エーカーほどの土地を購入して入殖し牛・鶏を飼育するなど農業を試みたが金銭的に行詰り計画は挫折した。一行の多くはサンフランシスコに出てアメリカ人家庭にスクール・ボーイとして住みこんだ。^{註13}万は、伯母ただが息昌一郎独りを渡米させるのにしのびず同行することになったが、彼自身の目的は美術の勉強にあつたことは明らかである。六月二二日の日附をもつ書簡によれば、万はアメリカにくくと直ぐにある家庭に住み込んでいたと思われるが、九月の記入のある書簡は、1234, Bornita ave North Barkely の発信になっており、美術勉強のできない不満と生活の困難である現地の状況を訴えている。少し長いが、滞米期の万を知る上で必要と思われるので部分的に引用しておきたい。

伯母様 小生は相変らず壮健に候間御安心下度候。あなたに一寸神經御起こしなされ候由、其の後御機嫌如何かに候哉。扱て、当地はほんの田舎にて美術学校などは無之、つまり新開の労働地なれば絵など学ぶ事は出来不申、荷舟君(筆者註・昌一郎)も僕の事を心配して東部に行く方よろしからんと申居候。東部とは日本なれば上方にて開けたるアメリカに候。荷舟君も追々東部に行くならんと存候。(中略)

絵を習ふ学費とらざるからとて、今日日本に帰る事は無論出来ず、勉強していらきものになりたき考に候間、少し弱音をはくようなれど、一ヶ年百弗即日本金にて二百円ただ三ヶ年間で度候。当地の学校は夏休みは四ヶ月(六・七・八・九月)に学校は八ヶ月間に候。四ヶ月の夏休みに休みなく働き八十円位ため、東部は月謝は当地よりも高く十円より下らざる由なれば、此れを八ヶ月間の月謝と致し、極く下等なる室を五六円位にて(普通は八円位より十円位)借り自炊して五六円を食料となし、合わせて一ヶ月十二三元にて生活し、余りは小使からの洗濯料、湯代あたまり代等に使用し、極質素にして間に合わせ、絵の材料は午後学校より歸りてよりの職業、たとえば夕飯の皿洗等の如き労働をなして、一週間壹円五六十銭位とれる事なれば、それにて絵の具等を買う考えに候。かくして寢食を忘れると云う具合にして、一生懸命勉強したならば三ヶ年位にて立派なる技倆を得る考えに候。一人前の腕になれば、その技術にて金をとり、且つ勉強する事も出来候。(略)

さて、右の書簡にみられるような苦心にも拘らず、東部への転進も美術学校入学の希望も果し得ず、万は単身帰国した。帰国の年月日は分明ではないが、翌明治四〇年二月までには帰国している。東京美術学校は同年三月一日から一五日に第二一回生の募集を行なつたが、万はこれに応募しているからである。

ここで今一度、中学卒業期に戻って考えてみると、万は中学卒業と同時に早稲田高等予科へ進学したが、その時点で彼は画家を志す決意がなかったと考えねばならないであろう。渡米に際しては、書簡の文面に明らかのように美術勉強が渡米の真実の目的であった。おそらく万は渡米を契機として画家への道を決意にしたと考えられる。

美術学校時代

明治四〇年四月、万は東京美術学校西洋画科予備科に入学、同年九月本科に進学した。同期生は、片多徳郎、斎藤知雄（素巖）、熊岡美彦、平井為成、山下鉄之輔、御厨純一、金沢重治、神津巷人など二八名であった。

「私の履歴書——苦楽十年」（『中央美術』大正一四年一月号）のなかで万は、「さかのぼって考えるのに面白かったのは、美術学校の五年間であった。この五年間丈がぼっかり陽があたっている様な感じである」と回想しているが、万にとって五年間の在学期間は、彼の生涯のなかで最も平穏で楽しく幸福な希望に満ちた時期であった。美校生時代の彼は温和で、級友のなかでは幾分大人っぽい感じを与え、真面目な勉強家であったが、一面では時に奇抜な茶目振りを発揮することもあり、「バンサン」「マンサン」「マンテツ」「ヨロテツ」と愛称された。

美術学校における万の勉強ぶりは、現在残されている一〇〇点を超える多数の作品によく示されている。これらの作品は制作年の記入のあるものは極めて少なく、風景写生の小品が最も多く、ついで人物、裸体習作、静物などをみることができ、これらは一部を除いて殆ど習作の

域を出ない未完の作品である。しかしこれらの作品を通観してみると描写技術の進展はともあれ、作風の移行をある程度たどることができる。

稚拙さはともかくとして、当時の画学生一般にみられたであろう穏やかな外光派的描写をもつ白馬会風の作風から、後期は印象派的手法と色彩の作品となっている。その過程をほぼ明らかにしているものは一群の裸体習作であるが、最も早期の稚拙な〈裸婦〉は論外として、〈裸婦〉（前をむく上半身）（挿図3）〈女の全身裸像〉〈男の全身裸像〉（挿図4）などアカデミックな堅実な描写で的確な素描力を示しているが、「四二・十・廿日」の年記をもつ〈裸婦〉（挿図5）などに見られる淡彩でありながら印象派的な彩色の陰影部をもち、大らかに人体の量感を把握している。さらに後期と推定される習作では、青、赤、黄などの鮮烈な色彩の点描によった作品を大胆に試みている（挿図6）。風景においてもこの間の事情はほぼ同一であるが、この期の風景習作には視点を低くおいて樹木の幹などを前景にとる構図が幾分目立っており、後の俯瞰する視角の多用と対照的である。

学生時代の万の作風について金沢重治は「デッサンは大きくのびくした線で、殊に面を大きく見る事に秀いでて色彩は美しく異彩を放っていられた^{註14}」と記している。万は美術学校後期には後述するように、すでに既存の日本洋画の枠からはみ出た方向に一歩踏みだしていた。その一つの結着点は卒業制作「裸体美人」にまず示され、続いてヒュウザン会出品の諸作に明示される。この美術学校後期からフェウザン会にいたる作風展開と諸作品の検討の前に、美術学校時代とその直後の事蹟とその周辺を述べておかねばならない。

明治四〇年一〇月、白馬会第一回展が開催されたが、この年九月に本科に入学したばかりの万は、〈風景〉一点を出品した。白馬会一二回展は翌年四月に開かれているが、これに万が出品したか否か現在のところ明らかにし得ない。同展の一三回展（最終回展となった）は、なかに一年おいて明治四三年五月一〇日から六月二〇日まで開催され、万は〈花〉〈雪〉〈夜〉の油彩三点を出品した。これらの作品がどのようなものであったか明らかでないが、おそらく白馬会風の平明温和な写実の作品であったろうと想像される。

明治四四年、万は同級生の平井為成、山下鉄之輔、日本画科の広島新

太郎らとアプサント

会を結成し、同年五

月二〇日、二一日の

二日間本郷東大前の

喫茶店パラダイスに

於て同人小品展覧会

を開いた。この会は

木村莊八によれば、

「長髪垢面の画人が

文字通りアプサンを

傾けつつ、同時に油

絵展覧会をやった様

の工合式」であった

が、美術新報（二〇

挿図3 裸婦（前をむく上半身）

挿図4 男の全身裸像

一号）は「若々し

い元気が満ち溢

れて居た。其の

『新しい芸術に

生きたい願望』

が明らかに看ら

れて面白い。是

は慥かに我芸苑

の一面の願望を

代弁して居る」

（雪堂）と報じて

いる。会場には

二ヶ月前に九州

で死去した青木繁の遺作二点（内一点は自画像）が陳列された。万自身が

青木の芸術にどれ程の敬意と親和感をもっていたか詳らかでないが、彼

等同人の「新しい芸術に生きたい願望」の身近な指標を青木繁に見出し

ていたか、また秀いでた天才の不幸に対する哀惜の情の表現であったか

も知れない。

明治四五年一月一日から五日まで巢鴨町仰高小学校に於いて巢鴨洋

画展が開かれた。出品者は万の他、松村巽、相馬甚一、近藤重一、金

沢重治など、かつての菊坂洋画研究所とその後身、原町洋画研究所出

身の若い画家達であった。これらの小展覧会についてはその詳細を知る

ことができないが、巢鴨洋画展に関する美術新報（二〇九号）の短評に

挿図5 裸婦

挿図6 裸婦

も「作品に就ては、皆若々しい元気に充ちて居ると覚える。

そして又一種新しい形式を追いつつある痕が見える」とみられるように、万においては先の白馬会出

挿図7 風船をもつ女

の珠寶だったと思います——あの愛念の籠る眼は、あの時と雖も後と変わっていません。鼻頭がほっそりとして、寂し気でした。(略)

で、白熱ガスを天井から机辺へ引下げて、机は四脚のテーブルです。その辺に三脚画架があって大きな布がかかっていたと思う。或いは絵の具箱があったと思う。パレットが出ていたし、筆に至っては雑然を通り越していました。又その辺に、巻煙草をはたくものとか、羊かんの様なものとか、紙類、日用道具。からかみの二三分通り開いた戸棚の中は粹類で紛然としていた。

瓦斯が経えず頭の上でボーボーと云いました。(略) (「みづゑ」昭和二年六月号)

品作とは全く異ったものであったろうことが容易に想像され、既に後期印象派の影響を反映した作品であつたろうと推測される。特にアブサント同人展は、ヒュウザン会に先行した後期印象派的傾向の集団として注目される。^{註15}

この頃、万は小石川区原町に居住していた。当時の彼の風貌と生活の周辺を木村莊八はわれわれに次のように伝えている。

平井為成及山下鉄之輔は万と同じく美校の、同級生です。瓜生養治郎・塚越芽以治及私は葵橋研究所の者です。瓜生と平井とが同じ小石川の下宿にいたので、それから引いて万君を相知るところとなって、就ては我々で何か会をこしらえて展覧会をしようではないかと云う相談になり、私としては初めて、紹介されて未見の人「万鉄五郎」を訪ねに行ったわけだ。

(略)

二階を上った六畳の間(?)に、万君はいました。その頃万君は大変痩せていて、非常に古いと思はれる羅紗の学校服に、襟からジャケツをぐるりと鶏頭の様に出して、白哲、口鬚が非常に濃く思はれました。何となく臆したる差し控へた物ごしで、眼は——あのつぶらな綺麗な眼は、万君一生

この文章には、美術学校後期からヒュウザン会に至る時期、明治四五年前後の万の肖像とヒュウザン会参加の人脈が浮彫されている。そしてこの期の作品、表現主義的な〈自画像〉や〈風船をもつ女〉(挿図7)などの燃焼し緊張した空間を想起されるものがある。

こうしたなかで万は、〈裸体美人〉(挿図8)を制作し、明治四五年三月二九日、東京美術学校西洋画科本科を卒業した。万は平井、山下と共にこの日の卒業式に欠席した。^{註16} また、教員免許証を受けなかった。その

国立近代美術館蔵

理由は「免許証があれば、苦しみに勤めることになるだろう。なければやむを得ず頑張るだろうから」ということであつ

挿図8 裸体美人

理由は「免許証があればやむを得ず頑張るだろうから」ということであつ

註17 画家として生き貫ぬこうとする万の不退転の決意が密かにあったことをうかがわせる挿話である。

〈裸体美人〉は三月二九・三〇日の両日、卒業制作陳列として出陳された。作者が自ら「ゴッホやマチスの感化のあるもので半裸の女が赤布を巻いて鮮緑の草原に寝ころんでヘイゲイしている図」(『私の履歴書』)と後に解説したこの作品は、日本におけるフォーヴィスムの最初の作品として後年高い評価をうけたが、ここでは発表された当時の評価をみておきたい。まず、卒業の成績は卒業制作によって評点を受け、順位を決められたわけであるが、万が受けた評点は七二点であり、席次は西洋画科本科卒業生一九名中の一六番であった。前述のように後世高い評価を受けたにも拘らず、当時の新聞・雑誌の記事にもその名を見出すことはできない。例えば、美術新報二二二号は短評のなかで、洋画については御厨純一・斎藤知雄・片多徳郎らの作品をあげた後、「他にキュービズムめいた作品を見受けた」と記しているが、これが〈裸体美人〉を指すものであるか否かわからない。ただ、当時の批評界は画家を含めて、印象派、後期印象派、フォーヴィスム、キュービスムの絵画的視覚について明確な知識も認識もなく、すべてをキュービスム、或は新流行といった言葉で評しているから、この評語のなかに万の作品も含まれていた、と考えても大過はないであろう。しかしながら万自身にとっては学校時代後半の歩みを一つの結実に、新たな自己の出発をはっきりと証し立てることになった。

註1 生年の月日は、早稲田中学校の記録には一月七日、と記載されているが、この記録簿が大正初年頃の作成と推定されるので書写の際、誤記されたものと思われる。東

京芸術大学の記録には、一月一七日となっており、死後最初の平凡社刊画集に附加されている小林徳三郎作成の万鉄五郎年譜もこれを踏襲しているが、昭和二年遺子博輔氏は一月一八日と訂正した文を細川書店刊画集に書いているので、ここでは、一八日をとった。

2 清水七太郎「鉄さんのことども」(「アトリエ」四ノ六)

3 古画備考・四十七倭絵・焼絵の項のところにその名がみえる。詳細は不明であるが幕末狩野派の画家であろうか。

4 明治三四年六月一三日初版、発行所は新声社であった。鷗外森林太郎が題言を寄せて次のように書いている。「書中芸術を求むるは非なり若し芸術は書中に求むべからずと謂はば又愈よ非ならん^{クレッシェンド}。芸術は芸術の田地に非ずと曰ふは是なり然れども芸術者中往々能品を出すことありと曰ふも亦復是ならん此書は水彩画の技巧を説くものにして主に寫業画家の為にすと云ふ知らず誰か善く此書を読みて一旦繫縛を脱離し闔然として作者の林に入るべき予著者大下氏と旧なり書成るに及びてこれを書して其首に弁す」と。本書の内容は、写生の準備、写生の方法、着色につき著者の経験、学理上色彩の定義、質問につきて、の各章よりなり、水彩、写生道具の揃え方、風景・静物など写生の実際的方法、洋画参考書、用具の売店に至るまで懇切に紹介している。『追想大下正男』の中の小野忠重氏の一文によると、本書は発行の年間に六版二万部をかぞえ、質問状は連日著者の机上に山積したという。明治三七年に『水彩画階梯』として増補改訂されたが、それまで十六版を数えた。

5 明治三九年六月二日アメリカ発信の書簡のなかに「仕事は至りて楽にて根岸より早稲田に行った時よりつかれ不申候」と書かれていることからうかがえる。万敏子氏の談によれば、万はただ東京に家屋を購入し分家筋に当る万清蔵夫妻を住まわせて素人下宿屋のようにしていたという。

6 早稲田中学校学籍簿、万菊三の欄、万品一郎の欄の記載による。菊三氏の談によれば、渡米の時は白山御殿町だったと記憶している、ということであった。

7 三宅克己『思ひ出つるまま』、森口多里『明治大正の洋画』参照。

8 後藤瑞巖は後に妙心寺管長、田子一民は代議士、農相、久慈直太郎は産科医、日本赤十字産院長、松岡忠一は農学博士、大沢久蔵は埼玉県行田市の足袋材料問屋と夫々各分野において活躍し名をなしている。

- 9 田子一民「禅堂の故万君」(「アトリエ」昭和二年七月号)
- 10 土方定一「万鉄五郎ノート」(「三彩」昭和三十七年九月号) 参照
- 11 「日本近代絵画全集」九・宮川寅雄「万鉄五郎・小出檐重・古賀春江」(講談社、昭和三十八年)
- 12 「円覚寺史」参照。
- 13 故久慈直太郎氏が筆者に語った談話による。久慈氏は一行より少し遅れて渡米した。
- 14 十の字「学生時代」(「みづゑ」昭和二年六月号)
- 15 岡畏三郎「明治末期に於ける『新傾向』に就て」(「美術研究」一六〇号)
- 16 神津巷人氏の談話によると、万、平井、山下は級内の革新派で、三人は共謀して卒業式をボイコットしたという。
- 17 淑子夫人の談による。同期では他に片多徳郎がそうであったという。

図版要項

- 一 万鉄五郎筆 木の間風景(原色刷) 新潟 長岡現代美術館蔵
麻布油彩 縦七三㎝ 横一〇〇㎝
 - 二 万鉄五郎筆 太陽のある風景 岩手 某氏蔵
板油彩 縦二四㎝ 横三三㎝
 - 三 万鉄五郎筆 自画像 奈良 八木正治氏蔵
麻布油彩 縦四五㎝ 横三七㎝
 - 四 目連救母経絵部分(長者の邸宅) 京都 金光寺保管
一―三 陰里鉄郎「万鉄五郎―生涯と芸術―」本号及び二五八号参照
 - 五 同 (地獄めぐり)
 - 六 同 (盂蘭盆会)
紙本版画墨刷 縦三三・三㎝ 横(全長)五九六・三㎝
- 四―六 宮次男「目連救母説話とその絵画」参照